牧野義雄研究序論

張　偉雄

(一)

異文化理解とは何かを考えるとき、「異文化をまたがって生きた人物」に焦点を当てることは、一種の有効な手段である。ダイナミックな文化交流の中で、同化、統合、共生といった複雑な相互作用を通して、自文化や異文化は再構築されたり、再生産されたりするのである。文化交流の重要な媒体である人物の異文化体験を考察することは、こういった再構築された文化を解明する鍵でもある。

近代以来、日本や中国において多くの異文化体験の先駆者がいた。かれらは貴重な体験をもとに、数多くの異文化体験談を残してくれた。その数多くの異文化論の中から、たまに非常に排他的、攻撃的な異文化論も見当たるが、異文化を自分自身の文化的養分として積極的に吸収し、自文化、異文化にも多大な貢献を成し遂げてきた人物も多く存在している。

中国の外交官、文人黄遵憲がイギリスに駐在していたとき、何度もロンドンの霧を描いていた*1。それはまるでロンドンの大霧がかれの滞在時の憂鬱の原因であるかのような印象さえ読者に持たせた。黄遵憲は、霧をロンドンの、ひいては大英帝国の象徴とし、それを揶揄することによって、自分の不平不満を発散しようとしていた。黄遵憲の詩には、英国は「太陽の沈まない帝国」どころか、首都ロンドンには日が見えないではないか、この空を隠してしまうほどのロンドンの霧の量は、世界各地のすべての霧を集めても、比にはならないと言って、巧みに揶揄していた*2。他の詩に「有船吾欲東」(船があれば、東方の国に帰りたい)*3と詠ったものもある。ロンドンを離れたい気持ちが強いことが分かる。

黄遵憲と同じ東洋人の夏目漱石も、自然現象の霧に、さらに工業の煤

煙による大気汚染を厳しく指摘したことがある。漱石はかれの日記にロンドンの空気について、「倫敦の町を散歩して試みに痰を吐きて見よ。真黒なる塊りの出るに驚くべし。何百万の市民はこの煤煙とこの塵埃を吸収して毎日彼らの肺臓を染めつつあるなり。我ながら鼻をかみ痰をするときは気のひけるほど気味悪きなり」*4と書いて、まるでロンドンの問題点を見つけ出し、抑圧されていた自分のもろもろの不満を発散しようとするきらいさえ読み取れる。夏目漱石は後日帰国してから、英国に対する一種の絶縁宣言でもあるかのようなことを書いていた。「謹んで紳士の模範を以て目せらるる英国人に告ぐ……自分の意志を以てすれば、余は生涯英国の地に一歩も吾足を踏み入るる事なかるべし」*5。これは黄遵憲の「有船吾欲東」の発言にも通じるものが読み取ることができ、黄遵憲の詩に婉曲に示した「絶縁」の気持ちを明らかにしたようなものだと言えよう。

以上のように、異文化に放り出された一個人の異国での「憂鬱」というものは、個人のアイデンティティーに絡んでくる政治的文化的な原因によって、醸された部分が多い。背景にある出自の文化が認知されないまま、個としての自分自身さえも、価値のない厄介もののように扱われているように意識したとき、この「憂鬱」が強く現れてくるものであろう。黄遵憲や夏目漱石は自国においては、文化人として広く認知されていたが、西洋の異国においては状況が一変した。軽蔑の眼差さえ感じさせられていた。これはかれらの強い「憂鬱」を作り出した要因の一つであろう。しかし、すべての同時代の中国人や日本人が英国で憂鬱な生活を送っていたのでもない。積極的に文化的相違を乗り越え、異文化をわが糧とし、楽しもうとする人もいた。

本稿では異文化の理解、共生のメカニズム探求の一環として、ほぼ黄遵憲や夏目漱石と同時代にロンドンに滞在していた、日本人牧野義雄に焦点を当てて概観し、牧野論の問題提起の契機をつくりたいと思う。

(二)

牧野義雄は1869年愛知県に生まれた。1887年から米国人宣教師 Rev. Klein が創設した「名古屋英和学校」(Nagoya English-Japanese College) に入学し、1892年に卒業した。その翌年の1893年、アメリカに渡航し、サンフランシスコの John Hopkins Institute of Art で美術の勉強をはじめた。４年半のアメリカでの勉学を終えたのち、1897年に英国に渡り、South Kensington College of Science and Art、Goldsmith's Institute および Central School of Arts and Crafts などの美術関係の学校で勉強した。それ以来45年間ロンドンに住む。1942年大戦のため引揚船で日本に戻り、1956年逝去した*6。

牧野義雄の自著によると、かれの誕生日は1869年（明治２年）12月25日である。後々に牧野義雄は繰り返して触れていたように、生まれ故郷の愛知県挙母村（今の愛知県豊田市）は、かれの心の誇りである。後年かれは自分の故郷のことを次のように回想している。

My own home village in Japan is Koromo. It is such a small mountainous village in Mikawa, and although the view is beautiful, no pilgrims ever stop their feet at Koromo. Japan is so rich with charming landscapes, and my home village is not counted by the nation. However, if it were in England or America it would gain a great name by its beauty. I myself am very proud of it, especially because it is my own home. *7

以上の文からも分かるように、牧野は非常に自分の故郷を愛し、それを誇りに思っていた。この文は牧野が1912年に書いた回想文にあるものであるが、1893年日本を離れてから20年も近くなったときの牧野の心境を窺い知ることができる。長く異文化を生きた人々の文化論の特色の一つとしては、自他の文化が互いに参照物として存在し、ある文化現象を語るとき、この自他両者の比較は自然に出てくるものである。牧野の以上の文からも窺がえたように、かれは物事を議論するときに、自文化と

異文化との比較の中から展開するのが習慣化されているようである。美しい自分の故郷はアメリカや英国に置かれたら珍しくて有名になるかもしれないが、自然豊かな日本においては自分の故郷のような美しいところは随所に見られるものである。この強調の手法からみれば、かれが如何に自分の故郷、乃至日本の豊かな自然を誇りに思っていたのかを窺い知ることができる。

少年の思い出として、牧野は受けた漢文教育や日本の古典教育を非常に高く評価していた。牧野の父親は、かれのために義務教育で決められたもの以外に漢学などの教育も用意していた。かれの回想録には、このように書いている。

As my daily lessons at the school were too easy for me, my father began to give me some extra lessons. Thus I started all ancient Chinese and Japanese classics and histories ever since I was between eight or nine. I began to learn the doctrine of Confucius, Mencius, and others in my early age. *8

この早期な漢学教育によって、かれの東洋文化についての「知」が形成されたのである。またこの「知」があったからこそ、後年に東西の文化を自在に往来し、ユニークな比較文化論ができた所以である。孔子孟子の教えを中心とした漢文学習の楽しみ、有効性について、牧野はこのように評価していた。

Those books are written poetically and in most pleasant euphonies, so they were quite easy to recite. Indeed, I could not thoroughly understand several parts, but even now I can remember almost every word distinctly. And the older I grow the more I begin to understand. I am always so grateful for these lessons, because these doctrines really saved me from all the difficulties I have met only lately.（下線は筆者）*9

このような漢学的な教養は後の牧野の英国滞在に大きな影響を与えていた。後にかれが述べたように、東洋的な考え方、価値観はかれに生きる力を与えていた。同時に西洋文化を論じるときの、一つの座標として使え、常に比較という手法で的確に問題の核心を捕まえることができたものである。また東洋的な「知」の角度で英国を見るというスタンスは、異国の地において新鮮な感覚を与えることができ、異色な論者として歓迎されていた。さらに現実生活の中で、例えば生活難に陥ったとき、人種差別に悩まされたとき、この東洋的な「知」が多くの場合、牧野義雄の生きていくための精神的な糧としても役立っていた。

牧野義雄は、早い時点からすでに東西文化の衝突の現場に立たされていた。1887年に名古屋英和学校が創設され、牧野義雄はそこでアメリカ人の牧師 Klein に英語を習い、キリスト教の洗礼も受けていた。牧野はまじめに聖書の勉強もしていたが、しかし彼の言うには、それは信仰の対象としての「バイブル」よりも哲学教本として悉く深読みをしていた。それが故にかれは時々漢文の典故と比較しながら、学問的な好奇心から先生に大胆な質問などをしていた。この点について、かれは当時学校にいた宣教師からの評判が悪かった。それに対抗して牧野義雄も時々猛烈に反発したりしていた。牧野義雄は宣教師に次のような厳しい挑発的な質問もしていた。

Hadn't Judas Iscariot and those soldiers who crucified Christ fulfilled the will of God to kill Christ? You say the crucifixion of Christ was necessary, and yet do you say those who killed Christ were the sinners? Don't you think you are contradicting your own logic? *10

以上のような牧野義雄の質問に対して、当時の宣教師は適切な回答をしなかった*11。次のような会話の場面もあった。

Some missionary said, "You have read too many bad books. That has made you an evil. Give up all those horrible philosophical books and read

only the Bible.

……

One old lady missionary called me "very insincere" boy, and she said, "Perhaps you believe Darwin's theory too much. You know Darwin said we, the humans, are the descendants of animals. I think you are a descendant of pigs or donkeys, but we Americans are the children of god. *12

このような状況のもとで、当時牧野義雄に理解を示し、大きな影響を与えた教員に、飯沼という先生がいた。ある日、かれは牧野を自宅に呼んで、信仰についていろいろ話をした。その中に、このような一節もあった。

I find out that your heart is too large to fill up faith from the missionaries' lectures……But remember the religion is entirely different from the philosophies. You must not argue everything with your logic. It is by faith. *13

これをきっかけに、牧野義雄はよく飯沼と話をするようになり、宗教や信仰について冷静に観察し考えることができるようになったと後年には回顧している。

(三)

1893年（明治26年）牧野義雄はアメリカに渡航した。４年半にわたるアメリカ生活において、牧野は人種差別や貧困生活にかなり悩まされていた。かれのアメリカ印象は極めて悪かった。端的な事例であるが、1893年７月15日、牧野がサンフランシスコに到着したときの印象について、次のような発言があった。

I was really angry. I said to myself, "Oh, how mistaken I was to think America was one of the most civilized countries! This is really most barbarous country indeed. *[14]

この言葉の背景には、長い航海の間、あるいは上陸する際に起きたこと、つまり船に同乗していた、かれの中国人の友人たちが動物よりも酷く取り扱われ、自分もかなり侮辱されていたなどのことがあった。４年半に及ぶアメリカ体験の終盤において、牧野義雄はまた似たような発言をした。

This is a very rough sketch of my four years' life in San Francisco. All the time I was thinking that was not the place for me to stay long. Every day, nay, every hour, I wanted to get out from this actual Hell. *[15]

以上の言葉は端的に牧野義雄のアメリカ体験の辛さを示している。アメリカ滞在の詳細については別紙に委ねるが、強い精神力のある牧野義雄は、決してアメリカの滞在を無駄にはしなかった。かれはアメリカにおいて、サンフランシスコの John Hopkins Institute of Art で美術の勉強をはじめた。そこでかれは自分の画風の確立に重要な啓発を与えてくれた師にも出会えた。

渡米当初、牧野義雄の計画は文学の勉強をするものであった。しかし、あるアドバイスによって、かれは絵画の勉強をきめた。その経緯について、かれの自伝には次のように書いている。

At that time I met with the Japanese Consul and some other elderly country-fellows, and I told them my ambition to become an English writer. They all advised me to be an artist instead, because the foreigners never become master of the other language.

I thought they were quite right and I decided to study the art. *[16]

1893年から1897年までのアメリカの４年余り、牧野義雄にとって、自分の絵画風格を形成させるのに非常に重要な時期であった。後年かれは「霧の画家」としての画風を確立し、社会から評価されるようになったが、アメリカでの勉強はまさに、それを可能にした下準備の段階であると言える。

牧野はJohn Hopkins Institute of Artの校長Arthur Matthewの指導を受けていた。校長はかれの東洋的なセンスを発見し、かれの特色を生かすように次のようなアドバイスをしていた。

「サンフランシスコの冬は比較的暖かく靄がかかっている。まるで透明なシルクのベールが景色を覆ったようである。このシルクベールは色調の濃淡法がよく合えばよろしい。色の配合を工夫してみなさい。」*17

校長のこの発言は、牧野義雄に大きなヒントを与え、かれの独創性を引きだすことに至ったのであろう。牧野は次のように回顧していた。

「私は、油絵具の強い原色とその反対色を混ぜることによって、とても柔らかい色を作り出すことができるようになりました。シルクのベールを描こうとして私は他にも多くの発見をし、明るさの感覚を身につけることができたのです。」*18

アメリカの４年間は牧野義雄にとって、決して順調で快適なものではなかった。ここでかれの遭遇した人種差別や強いられた貧困生活について、多くの愚痴をこぼしていた。しかし、かれは自分の殻に閉じ込めて逃避はしなかった。逆にかれは次のステップを踏み出すための基盤をしっかりと築いたとも言える。

1897年、牧野義雄はアメリカ大陸をあとにし異文化体験の地を英国に変えた。かれがロンドンに到着したのは、この年の末、12月８日であった。英国到着のときの印象は、アメリカのとは打って変わって、非常に明朗で好感溢れていたものであった。英国の第一印象として、かれは次

のように書いている。

I took the night train through Dieppe and New Heaven (Haven). From the very first it seemed to me to be a New Heaven; I had such a good impression with England. Those English officers on board the Channel boats had such gentle faces; they talked to me so kindly. *19

牧野義雄がかつて酷評していたアメリカの actual Hell とは正反対に、かれの英国の第一印象を「Heaven」と呼んでいた。このような雲泥の差をつけてしまう印象談の背後には、いろいろ理由はあるが、まず牧野にとって、もっとも直接な理由は人種差別から来るものであろう。典型的な事例として、牧野のアメリカの公園での出来事と、かれの英国の公園で体験したことを挙げることができる。アメリカにいたとき、かれは外出を恐れていた。公園などで日本人であるという理由で、よく石を投げられたり、暴言で叱られたりしていた。しかしロンドンでは、かれは幸いにも、そのようなことには遭遇しなかった。この点について牧野は次のように書いている。

In the streets first thing I noticed was so many silk hats. Then those peoples who were walking seemed to me so gentle, and with very dignified manners. Indeed, in California you cannot walk one block without hearing swearings. Here you hear apologizing words instead. *20

牧野義雄は以上のような明るい心境でかれの英国滞在を始めた。しかし、実際生活の中で、すべて天国であるとは限らない。牧野にとっていろいろ難しい局面もあった。酷い貧困のどん底に陥ったときもあった。アメリカでは人種差別に起因した不快があったが、英国では生活難による深刻な憂鬱などもあった。それにもかかわらず、それを乗り越えて、牧野は数多くの良識的な異文化論を発表した。それを通じてかれの異文化に対する基本姿勢をうかがうことができる。ロンドンについて牧野は

以下のような発言をしていた。

I am in mad love of London, ……because I have found out the real art and comfort in her. London life suits me so well. Of course I love my country best, and I do not want my country too much Europeanized; "Japan ought to be Japan forever" is my sincere desire. *21

牧野義雄のこのロンドン論から分かるように、かれはある対象を称えるときに、絶対化はせずに、文化を相対的に論じることに心がけている。自分の文化の良さを堪能すると同時に、他の文化をも評価できるセンスをもっている。以下の論からもかれの物事を相対的に見る視点をうかがうことができる。

London contains more variety of life than anywhere else. I myself always find out some friends with equal height. I mean, same degree of head and heart and pocket too. Nothing could be more comfortable than to meet with friends of the same degree in everything. This is the great reason I feel so homely in London more than any other place. *22

牧野は異文化を楽しむ術をよく会得していたようである。I myself always find out some friends with equal height. 異なる文化の中にも、自分の「場」は見つけられる。この異なる文化が豊かな多様性を持っているほど、自分に合致するものも多く存在するはずだという発想である。牧野はロンドンの文化的豊かさについて、次のように言及していた。かれの言うには、ロンドンは、"Just like a vast ocean where sardines as well as whales are living together." である。この多様性のある町には無限な可能性が潜めているというのである。

If a millionaire of other towns comes to London, he could not be proud of his own wealth. If a beggar comes to London, he would be surprised to

see some one poorer than he. A most beautiful stranger could not expect to be crowned for her beauty, and an ugly foreigner need not be ashamed of his ugliness. Wise and fool both shall not be put to the extreme ends either. Perhaps even the robbers and pickpockets may find enough friends! *23

ほぼ同時代の黄遵憲や夏目漱石のロンドン滞在は、国の派遣ということで金銭的な面においては、かなり恵まれていたのだが、ただあまりにも自分の殻に閉じこもり、心理的には外交官官邸や中流階級の下宿から外の世界に出ようとしなかった。その結果、文化の多様性を認識することができず、相対的に自他の文化を論じることができなかった。差別を受けたと意識したら、猛烈な反発に走る傾向が現れたのである。

一方、牧野は、芸術に身を捧げ、貧困な生活を送っていたが、その貧困の中でも、ロンドンの人々と積極的に付き合い、自分の「居場所」というものを見つけ、結局多くの場で親切にされ、豊かなロンドンの人情に触れることができた。これは結果として、文化を相対的に見ることができるような体質を鍛え上げられたのである。

(四)

牧野義雄は芸術家であると同時に文筆家でもある。かれは多くの随筆や回想録を書いただけでなく、東西文化比較の論著も著していた。かれの著作の代表的なものとして、以下のようなものがある。

1907年に『*The Colour of London*』を出版した。この本において、牧野はかれの芸術家的な角度からロンドンの独特な美を謳歌した。巻頭の言葉において、牧野義雄はかれのロンドン生活を次のように書いている。

I have been staying here over nine years, and yet not a single day have I felt tired of London. Every day I go out, and every day I bring back some fresh impressions. So I was, as usual, enjoying myself studying London,

notwithstanding this terrible heat. *24

このような豊かな感受性の持ち主であるがゆえに、前出にあったような黄遵憲や夏目漱石を悩ましたロンドンの霧についても、牧野は全然違う角度で論じることができたのである。牧野義雄の目に映った霧は以下のようなものであった。

The colour and its effect are most wonderful. I think London without mists would be like a bride without a trousseau. I like thick fogs as well as autumn mists. Even on a summer day I see some covering veils. *25

異文化理解の基本姿勢があったからこそ、黄遵憲、夏目漱石の大嫌いな「ロンドンの霧」を、かれの芸術的な目を通して、無限な魅力を感じ取れた。「霧の色と、それのもたらす効果は実にすばらしい。霧のないロンドンは、花嫁衣裳を忘れた花嫁のようだ」、これは複数の文化を一身に享受できた芸術家の本音であろう。

英国滞在して13年目になった年、1910年、牧野義雄は、『*Japanese Artist in London*』を著した。この本において牧野義雄は自分の歩んできた道程を振り返りながら、東洋と西洋の比較論議をも多く示した。13年の英国生活において牧野義雄はかれの努力によって多くの友人を得、画家として、一人の東洋人として英国の人々に認められるようになった。かれのこの本のために序文を書いた Douglas Sladen は、詩的なことばで、かれを讃えていた。

He was the proper, friend-making, everywhere friend-finding soul,
Fit for the sunshine, so it followed him,
A happy-tempered bringer of the best out of the worst. *26

Douglas Sladen は紙面を惜しまずに牧野に対して最大級の賛美をしていた。牧野義雄はかれの自らの努力によって、自分が異文化を享受でき

るようになったばかりでなく、異文化の社会もかれを心地よく認め、受け入れるようになったのである。

牧野義雄のバランスよい文化論は、時々英国の人々に新鮮な感覚をもたらした。これもかれの書物が英国の人々に歓迎された理由の一つだと考えられる。Douglas Sladen は序文の中にも、この点を指摘している。牧野義雄は『*Japanese Artist in London*』の中で、次のように英国社会について東洋人がゆえに発せたユニークな論を展開していた。

About the social life of English men and women, I used to praise that to my Japanese friends. The scholars of Confucius said, "Men and women must be separated in different rooms since six years of their age." They said this evidently because they were afraid of any impropriety. I must decidedly say they were mistaken. If you keep any difficulty aside the longer, the more will be the difficulty. It is not only about the different sexes but it is so with everything. One who faces towards any difficulty the sooner always conquers it the sooner. The English life shows it to me. *27

これは東洋的な知をもっていたからこそ、英国人では普段注目していなかったものに対して、興味深い論を示し、東洋人の同胞に問題提起できたのである。これはまた英国人の、西洋とは違う価値観をもつ東洋に対する理解の一助ともなったのであろう。

1912年牧野義雄は、『*My Idealed John Bullesses*』を出版した。この本は1909年から文芸雑誌 *The English review* に連載したものを、一冊にまとめたものである。この本において牧野義雄はいろいろな角度から、かれの英国女性に関するいろいろな話題を展開していた。例えば第十章において、かれは婦人の参政権について見解を示していた。かれは次のように書いている。

However, the distinction between the voters and non-voters must not be

made by the difference of the sexes. ……What else can I say, seeing such a strange phenomena that many well-educated and most refined John Bullesses with full sense in every respect cannot vote, only because they are women. And on the other hand those Little Englanders, hardly worth to be called humans, are voting because they are men? *[28]

この文から異国人でありながら、牧野は政治的な発言を躊躇うこともなく振るっていたことが分る。地域社会の活動に積極的に参加し、貢献していた牧野の姿が生き生きと現れている。

(五)

牧野義雄に関する研究はまだ多くはないが、その中で、まず注目すべきものは、かれの故郷、愛知県の豊田市の進めてきた仕事である。同市は教育委員会や郷土資料館において、牧野義雄に関する資料の収集や整理を積極的に行なってきた。昭和59年に豊田市教育委員会が同市の郷土資料館において、「郷土の偉人——洋画と南画の画家兄弟：牧野義雄・敏太郎展」を開催した。同展において写真図版80点、特別展出品80点を展示された。

さらに1997年牧野義雄が英国に渡って100年目にあたる年に、豊田市美術館で「牧野義雄展」が開催された。また1999年牧野義雄生誕130周年に当たり、豊田市教育委員会は牧野義雄研究の基本資料として「牧野義雄書誌」や「牧野義雄年譜」を収録した文集『牧野義雄物語』を編集し出版した。なお豊田市教育委員会において、牧野義雄の著書の編集翻訳も多数行なっている。

他に1990年に高城書房出版から『ロンドンの日本人画家　牧野義雄』という文献資料集を出版した。中には牧野義雄が「挙母学校同窓会雑誌」に寄せた「英国通信」やその他の英文自筆書簡も収録してある。また『牧野義雄画集・霧のロンドン』（地方・小出版流通センター、1992年）を編纂された恒松郁生氏の牧野資料に関する資料調査も注目すべきもので

ある。以上のような地道な作業は牧野義雄に関する研究に大きく寄与している。

異文化に遭遇するとき、多くの問題が投げかけられてくる。二十世紀はじめに西洋に渡った牧野義雄にとって、まず直面しなければならない問題として、人種差別、東洋文化に対する無知といったものが存在していた。しかし、牧野義雄はそれらのことを、越えられない障害物として、無策に降参するのでもなく、自己閉鎖的になるのでもない。その反対でかれはどんどん異文化に出向かって行き、そこから自分自身を豊かにしてくれる異文化を発見できたのである。牧野義雄はまさに異文化との共生を可能にした人物である。

今後牧野義雄を考えるとき、かれのアメリカ体験、英国体験といった現実生活に由来するアメリカあるいは英国論、および東西文化の比較から出てくる、かれの独特な文化共生論の実態を、全面的に把握することが必要であろう。同時にそれらの形成諸要因などについても深く検証しなければならない。このような作業を通して、牧野義雄の複眼的な思考様式とは何かを考えたい。同時に異文化の壁を乗り越えた牧野義雄の芸術家としての素質、多文化を一身に受け止めて、異文化と共生し豊かな国際人となり得た術なるものとは何かを検討の視野にも置きたい。

註

＊1　以下の黄遵憲や夏目漱石の英国体験などについて拙論「文化の差異とロンドンの憂鬱——黄遵憲、夏目漱石のロンドン体験をめぐって」（札幌大学文化学部紀要７号『比較文化論叢』2001.3.）を参照されたい。

＊2　黄遵憲著　銭仲聯箋注『人境廬詩草箋注』巻六「倫敦大霧行」上海古籍出版社　1981年　509頁

＊3　同上　508頁

＊4　夏目漱石『漱石日記』「ロンドン留学日記」（明治三十四年正月四日日記）岩波書店　1990年

＊5　夏目漱石『文学論』序　『漱石全集』第十四巻　岩波書店　1995年　13頁

＊6　Edited by Sammy I. Tsunematsu. *Yoshio Markino: A Japanese Artist in London.* Published by London House. 1990. 年表参照

＊7　Yoshio Markino: *When I was a child.* Houghton Mifflin Company 1912. p. 1
＊8　同上　p. 29
＊9　同上　p. 29
＊10　同上　p. 97
＊11　*Nagoya Gakuin and Yoshio Markino* という一文で John W. Krummel は、当時学院の牧師の年齢構成はほとんど30歳以下、日本語能力も十分ではなかったなどの事情から見て、「This may account to some extent for Markino's increasing disillusionment with them.」と指摘している。(*Yoshio Markino.* Published by London House.　1990年 . p. 23)
＊12　Yoshio Markino: *When I was a child.* Houghton Mifflin Company 1912. p. 97
＊13　同上　p. 99
＊14　同上　p. 211
＊15　同上　p. 228
＊16　同上　p. 219
＊17　牧野義雄『あさきゆめみし』暮らしの手帖社　1956年124頁
＊18　同上　p. 163
＊19　Yoshio Markino: *A Japanese Artist in London.* Chatto and Windus. 1910. p. 1
＊20　同上　p. 8
＊21　同上　p. 212
＊22　同上　p. 210
＊23　同上　p. 210
＊24　Yoshio Markino *:The Colour of London.* Chatto and Windus.1907 p. xxv
＊25　同上　p. xxxvij
＊26　Yoshio Markino: *A Japanese Artist in London.* Chatto and Windus. 1910. p. xiv
＊27　同上　p. 135
＊28　Yoshio Markino: *Miss John Bull.* Houghton Mifflin Company. 1912. p. 128

（本研究は平成15年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。）